

教職課程で求められる論理的な文章力：  
「アカデミック・スキルズB」の授業実践から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大杉, 稔, 濱谷, 佳奈, 田辺, 久信, 奥井, 菜穂子, 一柳, 康人, 上杉, 敏行, 神村, 朋佳, 佐橋, 由美, 中山, 美佐, 松川, 利広, 森, 繁男, 山本, 幸夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4843">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4843</a>

## 教職課程で求められる論理的な文章力 —「アカデミック・スキルズ B」の授業実践から—

児童教育学部 児童教育学科 大杉 稔 濱谷 佳奈 田辺 久信 奥井 菜穂子  
一柳 康人 上杉 敏行 神村 朋佳 佐橋 由美  
中山 美佐 松川 利広 森 繁男 山本 幸夫

**要旨：**教員養成課程において求められる重要な能力の一つに文章力が挙げられる。中でも、論理的な文章を書く力は、教育現場にあって、指導案の作成、研究紀要の執筆、職員会議への起案、各種通信の作成等において欠かせない能力となっている。本学には、学士課程の必修科目として「アカデミック・スキルズ A」「アカデミック・スキルズ B」の授業が用意されているが、保育者・教員志望の学生が多く在籍する本学科では、2019年度より独自にその内容の検討を開始し、その後3か年をかけて、より実践的な能力として機能するよう修正を重ねてきた。それは、レポートや卒業論文の作成に欠かせない大学生としての文章力に加え、将来、保育・教育現場で求められる知識や技能および感性を磨こうとする試みでもあった。例えば、テーマを「子ども」に関するものに設定して、そうした視点をもって思考を深めさせる工夫である。また、受講生を小集団に分け、グループ内の「討議」や「発表」を経て問題解決を図らせる取り組みである。受講生を対象とした質問紙調査からは、それらの取り組みの全てについて効果があったという回答が得られた。本稿では、2021年度の「アカデミック・スキルズ B」の授業実践を中心に、その成果と課題について報告する。

**キーワード：**教職課程、論理的な文章力、文献・統計資料の活用

### 1 教職課程で求められる論理的な文章力

平成17年の中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」は「優れた教師の条件」の一つとして「教育の専門家としての確かな力量」を掲げ、その具体例として「子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級づくりの力、学習指導・授業づくりの力、教材解釈の力」を挙げている<sup>1)</sup>。

これらの力を支える基礎力の一つが論理的な文章力であることは明らかである。例えば「子ども理解」に関わっては、園内研修において保育者自身が体験した事例を報告し合うことがよく行われるが、記録をまとめる際には、事実だけではなく問題点を整理して考察しなければならない。それらを限られた時間の中で同僚に良く伝わるように示す文章力が求められる。また「授業づくり」に関しては、学習指導案や実践記録を作成する際に、要点を整理して、かつ具体的に書く力が要求される。

しかしながら、教育現場からは、近年、初任者教員がこうした文章を自力で書くことができなくなっていることを憂える声も聞かれる。

### 2 「アカデミック・スキルズ B」の概要

本科目は、本学の学士課程基幹教育において「樟蔭コア科目」として位置づけられた1年生の必修科目である。

以前は、他学部と合同（学部・学科の異なる学生を組み合わせでクラス編成）で実施されていたが、2019年度より、児童教育学科独自の内容で授業を行っている。

春期（前期）科目「アカデミック・スキルズ A<sup>2)</sup>」からつながる秋期（後期）設定の科目である。カリキュラム上では「講義」に位置づいているが、演習の要素を多く含む学修内容となっている。

シラバスでは、本科目の到達目標は、以下の通り3点に分けて示されている。

- (1) 講義や論理的な文章の要点を正確に捉えることができる。＜聞く・読む＞
  - (2) 必要な情報を収集し、その結果を整理して、他者に分かりやすく伝えることができる。＜話す＞
  - (3) アカデミック・ライティングの基礎に則って、論理的な文章で自分の意見を述べることができる。＜書く＞

15回の学修内容は、図1に示すように、「文献」「フィールドワーク」「統計資料」「企画運営」の4つのユニットにより構成される。（同図では、第1回「ガイダンス」、第11回「保育・教育現場の声を聞く会<sup>3)</sup>」および、第15回「リフレクション」を除いて示している。）各ユニット3時間ずつの学修である。

ユニット1の「文献」とユニット3の「統計資料」の二つは、「調べる」「発表する」「書く」の3段階の過程を経て学修が進む。文献や統計資料を適切に引用し、主張のある論理的な文章を仕上げることを目指すユニットである。

一方、ユニット2<sup>4)</sup>およびユニット4<sup>5)</sup>は、「調べる」「発表する」の2段階過程であり、プレゼンテーション力の育成に重きを置いている。



図1 「アカデミック・スキルズB（児童教育）」の構成

本稿では、以下、主に到達目標目標(3)の論理的な文章に関わる授業(ユニット1および3)について、2021年度の実践記録を記すこととする。

### 3 「文献」を活用して主張する文章を書く学修

ユニット1は、文献を生かして主張する文章を書くことを目的としている。本ユニットを構成する3回の学修内容は次の通りである。

第2回…「夫婦別姓選択制」をめぐる新聞記事（読者の意見欄／4名分）<sup>6)</sup>を読み、グループとして賛成・反対等の立場を明確にして4枚のプレゼン用スライド（PowerPoint）に整理する。その際、記事の引用についてスライド上に明示する。

第3回…完成した前回のスライド資料を相互評価した後、「児童虐待をどうすれば防げるか」というテーマにかかる新聞記事（3社の社説）<sup>7)</sup>を読み、グループで協力し合って同テーマに対する考えを4枚のスライドにまとめる。（引用については前回同様）

第4回…完成した前回のスライド資料を使って互いに発表した後、各自の考えに基づき「児童虐待防止」にかかる主張を明確にした1200字程度の文章を書く。（社説は引用・参考文献として活用する）

ユニット1は、「アカデミック・スキルズB」最初の学修内容となる。1年生である受講生は、実践的な意味では、本授業で初めてPowerPointによるスライド資料を作成する<sup>8)</sup>ことから、PCの操作法も含め丁寧に指導を行う。受講生は、この第2・3回のスライド作成を通じて、論理的な文章を書くために欠かすことのできないスキルを、2点学修する。

その1点は、1000字を超える長い文章になったときに必要な「節（意味段落）」というまとまりを意識するということである。（この意識は、卒業論文などのさらに本格的な文章を書く際の「章立て」に応用されるものである。）文章が長くなれば、構想メモが必要になるが、スライドがその代わりをする。即ち、図2に示すように、スライドの一枚一枚が、文章を書く際の各「節」に対応するのである。

つまり、受講生は簡潔で分かりやすいスライドを作成しながら、「内容上の大きなまとまり（節）」を意識していく。スライド作成の指導は、同時に「節」の指導となっているのである。

もう1点は、文章を引用する際のルールを学ぶということである。自らの主張を支えるには根拠が必要だが、そのために文献（ここでは新聞記事）を活用する場合の手続きについて学ぶ。2種のスライド作成を通して繰り返すことで、その方法に慣れ、最後に文章化する際にも出典を明記できるようになる。

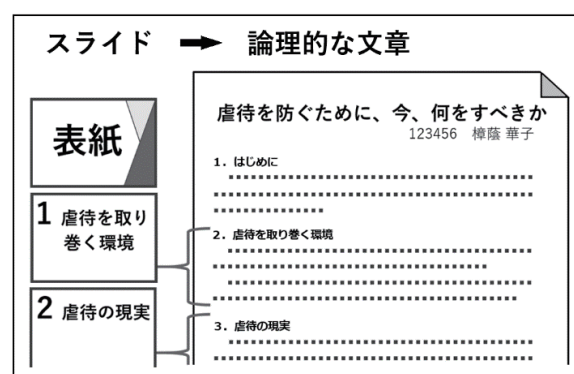


図2 スライドと「節」のある文章との関係

### 4 「統計資料」を活用して主張する文章を書く学修

ユニット3は、統計資料を生かして主張する文章を書くことを目的としている。本ユニットを構成する

3 回の学修内容は次の通りである。

第 8 回…「コンビニエンスストア」にかかる各種の統計資料<sup>9)</sup>を見て、5 年後の売り上げがどう推移（増加・減少・現状維持）するか予想し、スライド（PowerPoint）に整理する。その際、統計資料の引用についてスライド上に明示する。

第 9 回…完成した前回のスライド資料を相互評価した後、選挙の投票行動にかかる各種の統計資料<sup>10)</sup>を読む。それらのうち 2 点以上を活用し、「若者の投票率を上げる方法」について、グループの提案を 4～5 枚のスライドにまとめる。

第 10 回…完成した前回のスライド資料を使って互いに発表した後、各自の考えに基づき「若者の投票率」にかかる主張を明確にした 1200～1600 字の文章を書く。（統計資料は引用して活用する）

このユニット 3 は、ユニット 1 の学修の流れを受け継ぎ、2 種類のテーマについて提案スライドを作成した後、その後者について、統計資料を引用した論理的な文章を書くという流れになっている。こうして、何度も繰り返す中で学び方に慣れることは、本科目で学修すべきこと、つまり、ライティングやプレゼンテーションにかかる知識・技能の獲得に有効であった。（次節の質問紙による調査結果を参照）

本来は、それぞれの提案や主張に合わせて、その裏付けとなる統計資料を自由に検索させたいところであるが、教室内で一斉にインターネットにアクセスすることが難しいことは前年度までの実践で分かっている。そこで 2021 年度は、グループ内で多角的・多面的に思考が進むよう多くの統計資料を提示した。また、最終的に個人で書き上げる文章中には、各々が活用したい資料を自由に取上げて良いこととした。以下、このユニットの学修により受講生が仕上げた文章（一部）<sup>11)</sup>を例として挙げておく。

なお、これら提出された文章の評価については、観点をあらかじめ設定し、2 名の教員が同じ文章を読んで 10 点満点（2 点×5 観点）で評価し、その平均をもって確定評価とした。表 1 に示すのは、このユニットにおける評価の観点である<sup>12)</sup>。（各項目の内容に届かないものは 0 点である。）

5 受講生の評価と本報告のまとめ

本科目の授業終盤に、受講生を対象に電子アンケート

【文章例】 若者の投票率を上げるためには

1 はじめに

自分たちの暮らしやすい、望み通りの世の中を作っていくためには、投票による選挙への参加が必要不可欠である。なぜなら、日本は「人民による、人民のための、人民の政治」を実現している民主主義国家であるからである。つまり、暮らしやすい日本の形を作っていくうえで、自分たちの代表となる人を選挙で直接選び、選ばれた国民の代表者が国民のために政治を行うのである。

しかし、現状では投票率が 60%にも満たない。特に、若者の投票率は全体の投票率を下回っている。こうした現状では、これからの未来を作っていくべき世代である 10 代から 30 代の若者の意見が反映されないという問題点がある。

このような現状に対し、若者が政治に興味関心を持ち、選挙に積極的に参加するようにインターネットやメディアを活用した選挙の仕方を提案する。

2 若者の投票をめぐる現状と課題

本節では、若者の投票率をめぐる現状について明らかにする。

第一に、図 1.「衆議院議員選挙における年代別投票率（抽出）の推移」によると、全体の投票率が 55.93%であるのに対し、10 代は 43.01%、20 代は 33.85%、30 代は 44.75%ということがわかる。逆に 60 代は 72.04%である。ここから、全体の投票率よりも若者の投票率が低く、高齢者の投票率が高いことがわかる。つまり、これからの日本を背負っていくべき若者が自分たちの代表となる人を選ぶ選挙に参加していないということである。

第二に、こうした現状を打破するために、若者の投票率を上げる政策を考える必要がある。また、現状では選挙に参加していない若者が参加することで、全体の投票率も上げることができるのである。



図 1 衆議院議員選挙における年代別投票率（抽出）の推移  
＜後略＞

分 量	本文の字数が1200字以上1600字以下である。	2 点
	本文の字数が1000字以上1200字未満、または1600字以上である。	1 点
節と段落	① 段落をまとめて（※）節にしている。 ② 節には見出しを付けている。	2 点
	③ 節は 4 つ以上ある。④ 最後に引用文献欄がある。4 点とも満たしている。	1 点
引 用	統計資料を 2 つ以上引用し、タイトル、通し番号、出典も明示している。	2 点
	2 つ以上の引用はあるものの、表記の仕方に不足がある。	1 点
内 容 A	若者の投票率について、統計資料を引用しながら問題点を整理している。	2 点
	若者の投票率について一応の記述（説明）がある。	1 点
内 容 B	若者の投票率を上げるための具体的な方策を述べている。	2 点
	若者の投票率を上げるための一応の記述（抽象的な提案）がある。	1 点

表 1 ユニット 3 における文章の評価観点

トを実施した。

以下に示す質問項目のうち、問1～8は、「とても当てはまる」「いづらか当てはまる」「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」等の4択で回答する質問である。

- 問1：「論理的な文章を書く力」が身に付いたか。  
問2：「相手とコミュニケーションを取りながら説明する力」が身に付いたか。  
問3：「関心のあること、伝えたいことを調べる力」が身に付いたか。  
問4：「調べたことを数枚のスライドにまとめる力」が身に付いたか。  
問5：「文献や統計などの資料を活用する力」が身に付いたか。  
問6：「3人グループを単位とした説明・相談・発表」は学びやすかったか。  
問7：「個人用 PC」を使用した授業は学びやすかったか。  
問8：「メインの授業者がいて他教員がグループのサポートを行う指導形態」は学びやすかったか。  
問9：関心を持つことができた「テーマ」はどれか。  
(当てはまるものを全て選択)
- ・児童虐待 (64%)
  - ・若者の政治参加 (34%)
  - ・ユニバーサルデザイン (44%)
  - ・園や学校の行事の企画 (26%)

問1～8の全てにおいて、「とても当てはまる」「いづらか当てはまる」のいずれかを選択した者は9割を超え、また全てにおいて「全く当てはまらない」と回答した者はいなかった。受講生は本科目の学修に、一定の手応えと成果を感じているようである。

なお、問9の結果(複数選択)については、各選択肢の横に括弧書きで示している。本学科の学生は、その多くが保育者や教員を目指して入学しており、「児童虐待」についてはとりわけ大きな関心を寄せたものと考えられる。また、「ユニバーサルデザイン」のテーマについては、フィールドワークによって情報収集をする学習形態であり、テーマの価値に加え、足を運んで発見する喜びが加味された結果であると捉えてよいであろう。

以下、「論理的な文章力」(ユニット1および3)に直結する質問である問1、問5について、その回答結果の詳細(図3)を示し、まとめの考察を行う。

図3の左が示すように、「論理的な文章を書く力」については、99%の受講生が「とてもよく身に付いた」「いづらか身に付いた」と回答した。「アカデミック・

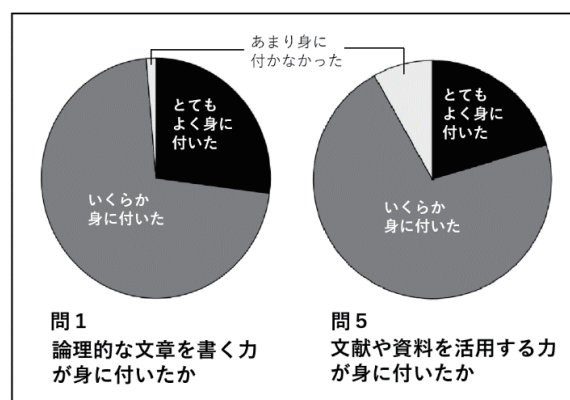


図3 論理的な文章を書く力の達成度

スキルズB」の学修は、ライティングスキルの向上に役立ったものと評価できる。一斉指導だけでは「書くこと」への抵抗を払拭できない学生に対し、個別に指導する機会<sup>13)</sup>を積極的に設けたことも、この結果につながったものと考えられる。

問5(図3右)の「文献・統計の活用力」については、1割程度の受講生が「あまり身に付かなかった」と回答している。また「とてもよく身に付いた」割合についても、問1の結果と比べやや低い。これは「自分なりの理由を挙げて主張すること」はできても、「他者の考えや科学的な根拠を活用して主張をすること」は、やはり一段階難しいことを表している。

このギャップを埋めるには、文章力のさらに外側にある学力、論理的にもの考えることの面白さを含め、我々指導者が、さらに魅力的な授業を創造することによって、その学ぶ価値を高めていくより方法はないであろう。

#### 注

1. 中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」(平成17年10月26日)
2. 「アカデミック・スキルズA(児童教育)」の授業では、論理的な文章を書くポイントとして、内容のまとまりを意識して段落をつくること、段落と段落を接続語でつなぐこと、段落にはトピックセンテンスを置くこと、また、主張を説得力のあるものにするためには、それを支える理由や根拠となる事実を書くこと、等の指導が行われる。
3. この会は、保育・教育現場で活躍する卒業生を大学に招き、その話を聞くという児童教育学科主催の行事である。

本学科の「アカデミック・スキルズA」においては、附属校園の保育・授業を見学して、幼稚



- 園から中学校教育までの教育の特質に触れるという学修を設定（2020・2021年度は、新型コロナウイルスの感染予防のため不実施）しており、その内容と関連付ける形で設定されたものである。
4. ユニット2は「大学生活を良くする」という観点から家庭から大学キャンパスまで（駅・公園等の公共施設を含む）に施されたユニバーサルデザインについて調べ、それを写真付きでスライド資料にまとめ、それらの改善案も含めて提案するという学修である。
  5. ユニット4は「幼稚園や学校で行われる行事」について知り、自分たちで新しい行事（親子行事、子ども主体の行事等）を企画する学修である。目的や子どもに付けたい力、開催の方法等をスライドにまとめ発表する。
  6. 朝日新聞デジタル「フォーラム」（2015.12.03-12.22）に投稿された読者の意見4人分を資料化して使用。「選択的夫婦別姓」に対する賛成・反対、それぞれの意見に触れられるよう、また、投稿者の年代・性別のバランスを考慮して構成されたものである。
  7. 学修資料として取り上げた社説は、「AIで虐待のリスク判断 テクノロジーで喫緊の課題解決を（日刊工業新聞、2019.3.29）」「虐待とDV 一体的な支援が必要だ（沖縄タイムス、2019.9.7）」「大阪の3歳児虐待死 なぜ命救えなかったのか（毎日新聞、2021.9.28）」の3点である。
  8. 本科目の受講生は、同時期、同じく学士課程教育科目である「情報処理基礎 A（B）」において、PowerPoint スライドの作成の仕方について学修する。
  9. 本授業で使用した資料は、「コンビニエンスストア店舗数の変遷（日本フランチャイズチェーン協会、2021）」「コンビニエンスストア来店客数と客単価の変遷（同協会、2021）」「日常的に利用する購入チャンネル別の平均利用頻度の推移（第1回新たなコンビニのあり方検討会事務局説明資料、経済産業省 商務・サービスグループ、2019）」「コンビニオーナーから見た課題（同グループ、2019）」「コンビニにおける人手不足の状況（同、2019）」の5点である。
  10. 本授業で使用した資料は、「衆議院議員総選挙における投票率の推移（総務省 HP「国政選挙における投票率の推移」より作成）」「衆議院議員総選挙における年代別投票率（抽出）の推移（同）」「アンケート結果『31日投開票の衆院選投票に行く予定』（南日本新聞 373NEWS.COM、2021.10.28）」「同アンケート結果『行かない理由』（同）」「アンケート結果『投票に行かなかった理由』（18歳選挙権に関する意識調査報告書、総務省、2016）」「アンケート結果『投票に行かなかった人の今後の投票意向と世代別の意向』（同）」、その他、親との関係による投票行動の違いを示すもの、直近の衆院選年代別投票者数を示すもの、現代の生活に対する満足度を示すものを合わせ、計9点である。
  11. 文章例の掲載に当たっては、受講生の承諾を得ている。
  12. ユニット1におけるレポートの評価においても同様の評価基準を設けている。
  13. 個別指導は、第4回、第10回の授業中に実施した。教室の後方に相談コーナーを設け、別室での指導を希望する場合にはそれにも対応した。また授業後、レポート提出期間に数度、相談日（希望者）を設定した。